

つむぐニューズレター

新潟いのちの物語をつむぐ会

事務局:〒940-0075 長岡市渡里町 1-2 長永寺 (木曾 隆)

電話: 0258-33-0804

mail: info@tyoueiji.com

<https://www.inochinomonogatari.com>



第9回例会 in 長岡

テーマ

12/4(日)

戦争といのち

14:00~16:30

(開場 13:30)

会場: 長永寺

参加費 1,000 円
(会員 500 円)

【話題提供】



難民とはどういうことか 黒岩 卓夫さん

【プロフィール】

昭和 12 年生まれ、6 歳で満州開拓団 (父は満州帝国の医師)、昭和 20 年 8 月 9 日、ソ連軍一方的に満州に侵略、(ウクライナと同様)、開拓団民 難民となり、15 日、日本敗北。ハルピンで妹弟死亡。21 年 12 月父の郷里、長野県美麻村 (白馬の近く山村) に引揚げる。

「子どもの頃の記憶を語らせていただきます。」



ひとのいのちの物語

国境なき医師団に参加して 中塚 英樹さん

【プロフィール】

1968 年、新潟県新発田市生まれ。山梨医科大学卒。卒後新潟大学第一外科入局し、消化器一般外科、生体肝移植に従事。専門は肝胆膵外科。2008 年より燕労災病院外科に勤務。消化器癌の外科手術、抗癌剤治療、緩和ケア、在宅看取りを行っている。2022 年 4 月、国境なき医師団外科医としてイエメン、モカの病院で紛争地医療に参加。新潟いのちの物語をつむぐ会世話人。

第8回例会《報告》

日時・7月3日(日)14時～

会場：普光寺

テーマ「生と死、死の悲しみ、

そして葬儀・あの世」

提起者

榎本 宗俊(僧侶)
田宮 朋子(歌人)

みろくぞう

先つ世は 楠なりし 弥勒像

とほき記憶に 鳥が棲みるむ

星の供花 いつも咲をり かなしみの
絶ゆることなき この地球のうえ

わが産みしを みなごふたり かの世にて
雛遊びの 齢すぎけむ

はらりはら ふるふるひらり ひとひらの
桜散りをり この閻浮提(えんぶだい)

作者 田宮 朋子



第8回浦佐例会実行委員長総括

(医) 萌気会 事務局長 上村 光男



2022年7月3日(日)浦佐の普光寺(樺澤賢正 住職)に於いて「新潟いのちの物語をつむぐ会」第8回浦佐例会が行われました。シンポジストを含めると59名参加の例会となりました。

新型コロナ禍前の2019年6月16日(日)に第4回例会を普光寺で行いました。今考えると、遠い昔の感があります。何故なら私が言うまでもなくこの3年間は新型コロナウイルスの感染拡大により生活様式が一変すると同時に、この会も感染拡大防止の観点から各地域の実行委員の皆さんがオンラインや会場参加の人数を制限するなど試行錯誤しながらの開催を行ってまいりました。

まだまだ新型コロナについては気が抜けませんが、ようやく通常に近い状態の開催が今回出来ました。残念ながら会終了後の懇親会については出来ませんでした。早く本来の日常が戻る事を願うばかりです。

この会の一番良い所はグループ談義「わかちあい」がある事です。それぞれの思いを語る場です。短い時間ですが自分の思いを語る機会があります。コミュニケーションの語源は「わかちあい」です。コロナ禍でコミュニケーションの機会が減っているように思います。今度参加してみてください。今回のグループワークは2組で21人の参加がありました。

今回の例会のテーマ「生と死、死の悲しみ、そして葬儀・あの世」の講演者、田宮さんの話の中にもお子さんの不条理な死というものもありました。ロシアのウクライナ侵攻では大切な命が奪われています。戦争に巻き込まれ大きな被害を受けている子ども達、新型コロナウイルス感染拡大による様々な悪影響など、不条理にあふれている悲惨な現実ばかりです。人間は死に向かって生きています。自分自身の現実や、生と死に向き合い、あの世へ思いを馳せながら生きていきたいと改めて考える事が出来た例会でした。参加いただいた皆さんに感謝致します。



報告

黒岩 卓夫

新潟いのちの物語をつむぐ会

第8回浦佐例会（7月3日：普光寺）

テーマ：生と死、死の悲しみ、そして葬儀・あの世

提起者：榎本宗俊（僧侶）、田宮朋子（歌人）

シンポジスト：西川 薫、樺沢賢正、黒岩卓夫

座長：上村光男

テーマの提起者、榎本宗俊さん、田宮朋子さんの内容の深い発言が終わり、次いで三者（西川 薫さん、樺沢賢正さん、黒岩卓夫）によりシンポジウムが進行しました。

私は、御二人の発言をとらえて、内容ももう少しわかりやすくしたいと考え、いくつかのポイントを質問様に発言者に語りかけました。

その前に、田宮さんは「黒岩先生から送っていただいた『千児観音チャリティ美術展』のカタログを見て、私の子もあの千児の中にいると思えました」とおっしゃいました。私たちにとってとても意味のある嬉しい発言でした。

そして私はさらに田宮さんに、千児観音への想いとして“不幸な母に幸せな子はいない”“幸せな母に不幸な子はいない”をひいて、「田宮さん、不幸な子あり、不幸な母ありから、短歌を歌う修行によって、生きる力を養い、立派な歌人になることによって、その“幸せな母”から不幸せだった子たちも幸せな子たちになっているとおもいますが」それに対して田宮さんは、笑顔で大きく“うなずいて”いただきました。

田宮さんは、母と子の不幸な思いを、歌にする営みによって新しい生きる歓びをたくさんの歌に込めてきたのではと思いました。



田宮朋子さん



榎本宗俊さん

榎本さんは、近くに住む関係もあり、昨日電話で「あなたは狂気とは何か、自分の体験から明日のシンポのなかで語っていただけますか」「あゝできます。そのつもりでいます。」との返事をもらっていました。私は会場の皆さんに話題を広げるために、皆さん、今は自分は正常だと思っていますか？異常と思っている人は？時々異常になると思いませんか？と問いかけました。そして「榎本さん、狂っている時と正常になっている時とどちらが生きやすいですか」と尋ねました。意外な質問だったらしく、慌てて、「そりゃ正常の時のほうが生きやすいですよ」と答えました。「狂うといっても医学的にみても色々ありますが、狂っているほうが、狂そのものが受け入れてもらえればそのほうが生き易いと思いませんか」の再質問に、彼ははっきり答えずに黙っていました。



西川 薫さん

ついで西川さんはどうですか？ ノーマルとアブノーマルの境にいるのではと面白い話題として、掛け合いを期待しました。

西川さんは、自分の半生を丁寧に説明していただきました。その中で自分の精神の動きを4つのパターンとして問いかけました。その中に ADHD が入っていました。私はこれまでのお付き合いを通して、「西川さんはタイプとしては ADHD ではないですか」西川さんは「そう思います」とうなずきました。西川さん

さんはすごいエネルギーを暴発させるとすると、おとなしくなってしまうたり、次々と哲学的話題を提供し、私はついて行けないことしばしばでした。

「西川さん、冷静で何でも気付き、やさしく対処するパートナーあつての活躍ですね。失礼ですがパートナーの手の平で暴れているのではないですか」これには黙っていたと思います。

最後に、とても丁寧に整然と仏教の基本を話していただいた住職の樺沢さんには「樺沢さん、とてもノーマルな話し方や内容でしたので、そのことがアブノーマルかもしれませんね。」との私のかけ言葉に、皆さんも面白そうに反応していただき、私の発言の前半は終わりました。

あとは残った時間で、私の実兄の葬儀をパワーポイントで説明し、最後に一時は疑問に思っていた葬儀というものはとても大切だと思いました。親族葬でしたが、生きている者たちのコミュニケーション再生の場になり、同時に自分を見直す貴重な機会になりました。

さらに私の妹と弟の道祖神の姿を借りた石仏は、満州の難民として死んだので、何も残っていない、本当に死んだという証拠は何もありません。家族の記憶も母と兄と私だけしかありません。そのうち2人亡くなり私1人です。近いうちにこの石仏が残るだけだと、次の世代に後を頼みました。

もうひとつ北朝鮮の和子姉さんの石碑は、全く生死不明のまま何事も残りませんので、お墓に建立しました。これもこの石碑しかありません。まだ生きているはずの家族もこの石碑に名を刻んであります。本当に亡くなった者、証拠もないがこの世から去ってしまった者、まだ生きているはずの人も祀られているお墓になりました。全て次の世代にお願いばかりです。さらに子ども10人ほど参加しました。儀式場からはみ出しもしましたが、見てる子はしっかり見ており、年齢なりの参加もできました。お斎には発言する子もいました。葬儀には子どももいて当たり前と思いました。

この会の趣旨である、「ひとそれぞれのいのちを物語ろう」にはそれなりに掘り下げることができました。特に榎本さん、田宮さんありがとうございました。また会場にお出でいただいた皆様には、良き聞き手になっていただいたことに心から感謝します。そして御一人ひとりがこの会に臨んで自分の物語を心に描いていただいたのではと期待しています。



樺沢賢正さん

最後に田宮朋子さんの短歌をひとつ記させて下さい。

「わが産みしをみなごふたりかの世にて雛（ひひな）遊びの齢すぎけむ」

2022.7.5 黒岩卓夫

第8回浦佐例会について

榎本宗俊

7月3日に田宮朋子氏とお話をしました。氏は高名な歌人であられ、自身の乳児を二人喪くされた体験をお持ちで、その悲しみを歌になされて角川短歌賞をお取りになられた方である。氏はその作家による自己浄化を語られたが、一方、読者代表としての私は自身の固有の悲しみの体験から田宮氏の歌を読み自己発見させられ、そのことによって人生の闇から立ち直った過去があったことを述べさせていただいた。つまり受け入れ難い現実から逃避せず、正直に向き合うことから始めて、それを受入れ、やがて新しい人生に再出発するという体験を語り合った。

人生は様々な困難に満ちており、大抵は見て見ぬふりをして日常を送ってしまうが、立ち停り、自己省察することが大事なことだと思います。そこから本当の人生が始まるのではないかと思います。日々の充実と言っても、そこそこに他ならないのではないかと思います。



シンポジストの黒岩卓夫さん

グループワーク

～いのちの物語を参加者自身が
つむぎ&わかちあうtime～

(①チーム)



【講演を聞いての感想】

- 今年の春、親しくしていた一人暮らしをしていた人が亡くなった。亡くなる時、駆け付けた方を待って居方と思うくらい亡くなるタイミングが間に合う場面に遭遇した経験を思い出した。
- ある葬儀の時、小さなお孫さんが「今日はおじいちゃんのお誕生日なんだね」と言ったことがあり、その場の空気感が変わったのを感じましたが、おばあさんが「仏様の世界に新しく生まれ変わる誕生日なんだよ」っておしゃり場の雰囲気や和んだ経験がある。
死の教育の必要性を改めて感じた。
- 祖父の葬儀で孫たちみんなの集まるきっかけのような感じがした。
- 葬儀のありかた、死への考え方がコロナにより変わった時代になってきたように感じる。家族葬やセレモニーホールでの葬儀が増え、地域で送り出すという場

面が少なくなってきたように感じる。

- 西川先生の講演に賛同する事が多くあった。仕事で自分以外の人へ気を遣う事が多く、生き方を楽にできる方法を勉強したい。
- 看護師の仕事をしていると死に対し何も感じなくって来てるのが正直ある。
身近な人の死を経験していないため、死に対して深く考えていない。
5年くらい前に自分が病気をしたころは「死」に対していろいろと考えたことはあったが、自分が健康になると「死」を考えるより、「生きる」について考えていくようになった。

【いかに生きたいか？】

- 自分の考え方が、親しい人の死を通し変わった。
- 地域おこしをしたかったが70過ぎると難しくなってきた。
石仏巡りをしていきたい
- 難しい・・・仕事柄人の葬儀に立ち合い、自分自身の時間や休みがとれないことも多く、お葬式や法事をしたくないというのが正直な気持ちかな
- 人と争わないで生きたい・・・
自分の趣味の時間を楽しんでいる。(ガンダム作りやイロイロ)
- 仕事に全力を注いでいるため、趣味が見つけれられていない・・・趣味を見つけられるようにしたい
- 単身一人暮らし。酒を飲んでリセットしている。自分の時間を作るようにしたい。

(②チーム)

(グループワーク発言者の話を受けて話はつながっています)

- この世、あの世(まよいの世界)仏の世界(悟りの世界)なのか。
こんな話がありました。
 - ・94歳のおばあさんが亡くなった。夫は34歳で戦死している。あの世に行って夫はおばあさんの事わかるかな(笑)
 - ・家のお墓に入りたくないというお嫁さんがいた。若い時にさんざん婆さんにいじめられたから、実家の墓に入りたい。
- 田宮さんの話しから。兄嫁も死産だったが子供さんを見る事もだっこする事もできなかった。田宮さんは死んだ子供さんをだっこ出来た(だっこさせてもらった)とても綺麗でつめたかったと。切ない話でした。



○田宮先生にあえて良かった。とても感動した。子供さんをお一人亡くされていたと思っていたら二人も亡くされていたと聞きびっくりした。

○田宮さんのお子様は3日目に亡くなられたと言っていたが、生まれたときに顔を見せてもらえてなかったのか。

○生まれた直後に顔は見せてもらい、足の裏にだけ触ってみた。10時間後に急変して3日目に亡くなった。解剖までしてもらったが死因はわからなかった。

子供の死、死ぬ順番が逆転することが一番悲しいとされる。悲しい死は美にならない。短歌を始めたばかりのころは、人に選んでもらえるものでは無かった。短歌は読んで終わりではなく発表(歌会)して評価してもらおう。角川賞を貰ってから有名になった。

○死に多く立ち会ってきた。子どもが先に逝くことはとても不条理だ。だが医師としては自由にならない。何もできない。ただ側にいて「先生来てくれて良かった」と言ってもらえるような関りしかできない。子供を葬った母に対してグリーンケアに力を入れている。残された家族。母が死ぬまで長い年月がある。あの世には直ぐに行けない。宗教家などの力が必要。

○ビハークでは家族会があり、亡くなった2週間後あたりに訪問している。

- 地域での葬儀の違いに大きく戸惑った。結婚して婿養子になり妻の父親が亡なり、喪主になった。何も解らないまま喪主をさせられドギマギした。
湯かん・・・荒縄を腰に巻き喪主さんからどうぞと言われたが何も解らなかった。
- 本当は私が喪主をやりたかったが地域柄か「そんな事はできない」とおじさん達に反対をされた。お礼の言葉として手紙を書いたがそのままだった。
- 亡くなった方を偲んでお礼の言葉として何かの機会に親しい方には是非伝えて欲しい事だと思います。
- 私は絶対に夫が死んだら私が喪主になります。
- あの世は無いと思う、でも幽霊はいると思う。
- 逢魔が時（おおまがどき）夕暮れの薄暗い時。現在は電気があって「逢魔が時」が無くなったので妖怪が出られなくなった。
脳の一部は死んでも人間は2～3日は生きている。聞こえているのではないか。耳は最期まで聞こえているので話しかけて欲しい。亡くなったからといって、悪口などは決して耳元で話してはいけない。



感想

お二人の対談に感動して

黒岩 秩子

3日(日)午後から浦佐の普光寺でつむぐ会例会が開かれました。コロナでかなりの間開けないでいたので、とても楽しみにしていました。桐鈴会の障がい者グループホーム「ひまわり」にお住いの榎本宗俊さんが、かなり前から、歌人の田宮朋子さんをお呼びしたいと言っていて、やっとそれが実現することになったからでもあります。

始めが、榎本さんと田宮さんの対談でした。まず、榎本さんが、生まれてきてからのことを語ります。家が守門村の薬店だったので、薬科大学に入学します。そこで学生運動に出会い、その中で統合失調症を発症し、大学は中退、精神病院に入院したりして、自分の20代30代はめっちゃめっちゃでした。その後、現代短歌に興味をもち、田宮さんの歌と出会い、文章を書いて田宮さんに送るようになりました。数年前からのことですがこの日が初対面だとのことでした。

それを受けて、田宮朋子さんの話。

榎本さんから「北方文学」を送ってもらうようになったのは、ここ数年のことです(10年にはなっていません)「文通」といっても礼状(はがき)を出すくらいのものでした。榎本さんは、私の短歌だけでなく現代短歌に興味がおありです。

私は、家に籠ってじっとしているのが好き。家が、お寺だったので、仏教書の校正の仕事をしていた。

田宮仁(まさし)と結婚して5年目に出産。生まれたときには3720グラムあったのに、3日後に亡くなってしまった。お乳をやることもなく、抱くこともなく、亡くなったあとベビードレスを付けた赤ちゃんを抱いた。(普通こういうことはさせないのだが、仁さんが、朋子さんの意思を聞いて実現してくれたという)そのあとの悲しみをぶつけることのできたのが、短歌だった。それをきっかけにして短歌会に入会した。

それから3年後に又出産したが、この時には死産だった。夫が「この悲しみはこれで終わりに」と言ったのでそのようになった。

短歌を作り続けてはいるが、短歌には疑問もある。「評価」ということがある。評価によって傷つく人がある。

私はこの話を聞いて非常に感動しました。朋子さんは自分が救われたという短歌の世界に対しても、きちんと疑問を提出しています。「歌人」として、誰しもが認めている立場でありながら、そこに疑問を呈している。この話を聞いてこのことに注目する人がほとんどいない現状がその後の話し合いでよくわかりました。

私自身、教員をやっていて、この「評価」ということが一番の「かべ」でした。

さてその次に、二人の対話となりました。田宮さんは、榎本さんが同人として文章を書いている「北方文学」をさかのぼって読んで、榎本さんの書く文章の難しさと同時に、博識であること、深く考えていることに感心したと述べてくださいました。榎本さんの日常を知っている桐鈴会の職員が一人も来ていなかったことがとても残念に思えました。日曜日だったので、子持ちの職員にとってはとてもでてこられなかったということでした。

第2部では、萌気会事務局長の上村光男さんが、10年前に肺がんの末期であると宣告され、がんとは死ぬもの、という常識だった当時ですから、「死」に直面した時の率直な感想が語られました。次は、去年の千児観音の展示実行委員会委員長だった西川薫さん、高校を卒業した後、就職もせず、大学にも行かず、フリーターをしていた。その時精神病院の看護助手をしていたことから、看護師の資格を取り、新潟大学に社会人入学をして、新潟医療福祉大学に職を得て、去年から、高崎パース大学の教授になったいきさつを赤裸々に語られました。次に普光寺の住職樺沢賢正さんが、「生と死、死の悲しみ、そして葬儀・あの世、看取りをあらためて考えよう」という実にノーマルな話をしてくださいました。

最後に卓夫が、皆さんの発言についての感想を述べながら、自分の兄がなくなった法要をコロナで1年たってから、親族30数名でとりおこなったことを報告。参加者みんながスピーチをして交流し、楽しい葬式だと住職が驚いていた。と話しました。

その後、二つのチームに分かれて、みんなですり合って別れとなりました。

(2022年7月7日)



普光寺様

毎月3日に毘沙門堂内にて御前立
本尊御開帳護摩法要(午前10時
～)を執り行っています。皆様方
のお越しをお待ちしております。

第8回浦佐例会に参加して

木曾 隆

浦佐例会は久しぶりにオンラインではなく全て対面で行われました。第7回の新潟例会はオンラインと対面のハイブリッドの例会でしたが、やはり対面の会合が私などにはしっくりくるように思います。早くコロナ禍が終息し、対面でそして例会終了後の懇親的懇談会が行われる日を願うばかりです。

さて浦佐例会は榎本宗俊さんの人生が赤裸々に語られ、新潟いのちの物語をつむぐ会の意義を改めて聞かせていただきました。その榎本さんが影響を受け立ち直りのきっかけをつくった、歌人田宮朋子さんのお話も自身の経験した苦しみ、不条理な体験から短歌の道に進みその短歌により救われたお話は感動しました。榎本さんとの手紙の交換からこの度の例会が企画され素晴らしい例会になりました。

その後のシンポジウムでは西川薫さんの話も普段の西川さんからは解らない内面の話など興味深く聞かせていただきました。黒岩卓夫さんも自らお兄さんの葬儀を通しての体験で葬儀のあり方を考えさせられました。樺沢さんも真言宗の立場から話され宗派の違いにも気づかされました。

最後のグループでの話し合いこそはこの会のメインであると思います。参加者が全員自らのことを話し、聞くこと通して考えることこそ例会の良さであることを改めて感じました。

次回の長岡例会は中塚さんの「国境なき医師団」に参加した壮絶な話を聞くことが出来ると楽しみにしています。

肺腑にすんと落ちた浦佐例会

関谷裕一

人間はリアリティがあると肺腑にすんと落ちてくる生き物であると改めて感じた例会でした。リアリティは「向き合ってみようか」という **do** の世界から「向き合わなければならない」という **must** の世界まで幅広く問いかけてくる力を持っていると感じます。その人が小生自身の人生に対して重みをもった存在として認識できました。

逆にリアリティがない場合、例えば誰々がこう言ったというような引用の世界やロジックの世界は、せつかくとてもいいお話であったとしても受け手には中々その感動が届きにくい印象があります。仮に感動があったとしても、他人事のレベルで「良かったね」「いい話だった」で終わってしまい、自分自身の深層心理にまでは届かない、奥深くまで入り込んでこないことが多いような気がします。

基調的話題提供をして下さった榎本宗俊さん、田宮朋子さんお二人によるまさにリアリティなお話、生や死に対して直視せざるをえない状況におかれて、否応なく自分自身と対峙せざるを得なかった体験をした者のみが持つエネルギーの発露に触れ、「いのちの物語をつむぐ」とはどういうことか自分自身に改めて問いかけるとても

いい機会となりました。

ところで、お二人に共通したフレーズに「北方文学」があつてとても驚きました。北方文学の創刊者は吉岡又司。実は、小生は今から50年余も以前の高校生時代にその吉岡先生から国語・漢文を教わったのです。小生は中学から大学に至るまで何故か殆ど教師嫌いでした。それが唯一「恩師」として尊敬してやまない人が吉岡先生でした。先生の著書や同人誌北方文学が今でも一部我が家の書棚にあります。詩人として日本的にも著名な人で教師としてもとても優れた人でした。10年以上前さしたる事情もなしにすっかり疎遠になってしまいましたが、何年か前に鬼籍に入られたと側聞しています。

基調的話題提供をして下さった榎本さん、田宮さんお二人の深いお話とともに、この北方文学というフレーズが吉岡又司師との邂逅を呼び覚まし、心の葬儀として師に合掌する機会を与えてくれたつむぐ会浦佐例会でもありました。感謝です。ありがとうございました。

浦佐例会の感想

今井洋介

実行委員のみなさま 本当におつかれさまでした！
朝の護摩の際の樺澤さんの美しい所作に感動いたしました。

上村さん 榎本さん 田宮朋子さん 西川さん 黒岩さん、どの方のおはなしも、例え30年間のお付き合いがあつても、「いのちを語る」場の設定がなければお伺いできなかったお話しでした。

みなさんの言葉の力に触発され、分かち合いの時間でも、自分のこれまでの葬儀や、看取りや、別れの際に抱いた感情があふれ出て、少人数でもっと時間をもって分かち合いをしたい、という気持ちになりました。

特に、田宮朋子さんのお話しは、芸術が生まれ落ちる過程を疑似体験させて頂いた思いがし、瞠目いたしました。

良い会を有難うございました。

重ねて御礼申し上げます。

(2022年7月7日)



開会挨拶の今井世話人代表
(後ろ)上村実行委員長・座長

お知らせコーナー

第42回いのちをめぐる連続講演会

新潟県立がんセンター新潟病院

講堂より ユーチューブ同時配信

講演翌日より1か月間再視聴可能

日時 2022年12月7日(水) 18:00~19:00

講師 岡村 毅 (おかむら つよし) 氏

東京都長寿医療センター研究所

自立促進精神保健研究チーム副部長(認知症と精神保健研究テーマリーダー)

東京大学 上智大学 大正大学 非常勤講師

<タイトル>

「ケアファーム：ケアする人と

ケアされる人の2分法を超えて」

当日のURL: <https://youtu.be/hDjyVjz5Kdo>



QRコード:

日本統合医療学会新潟県支部講演会

「一日まるごとトラウマケア」

(参加費: 会員 1000円・非会員 2000円)

申込み: togo.niigata@gmail.com

会場 天寿園 大広間 (新潟市中央区清五郎 633-8)

TEL 025-286-

1717)

日時 2022年10月30日(木)

午前の部 10:00~11:30

午後の部 12:30~15:00

午前の部

「応答されなかった被虐待者の叫びに応える」

講師 金谷光子 元新潟医療福祉大学教授

いのちとこころの支援センター専門相談員

司会 今村達弥 ささえ愛よろずクリニック院長

午後の部

心を癒す漢方~五臓六腑のダメージケア~ 中村あずさ

ストレスに対するTFT療法および気功 定方昭夫

アロマテラピーによるストレスケア 嵐 京子

ストレスに対するヨーガ療法 鈴木静子 大高美奈子

高田世界館《映画紹介》

10/8~ 劇場版 荒野に希望の灯をともし

~百の診療所より 一本の用水路を~

アフガニスタンとパキスタンで35年に渡り病や貧困に苦しむ人々に寄り添い続けた、医師・中村哲。戦火の中で病を治し、井戸を掘り、用水路を建設した。何故、医者が井戸を掘り、用水路を建設したのか?そして中村は何を考え、何を目指したのか?(2022年90分・谷津賢二監督)

10/22~ 霧幻鉄道 只見線を300日撮る男

2011年・・・福島で起きたもう一つの災害は、ローカル線復活の奇跡のストーリーを生んだ(2021年・80分/安孫子亘監督)

<http://takadasekaikan.com/schedule>

(by勝手に☆高田世界館サポーター:小出)

第37回がん征圧新潟県大会

どなたでもご参加頂けます。

(入場無料・事前申し込み不要)

新潟県民会館 大ホール

(新潟市中央区一番堀通町3-13)

日時 2022年10月6日(木) 午後1:00~4:30

特別講演「柳緑花紅~人生宝箱~」

県立がんセンター新潟病院 内科部長 今井洋介

がんがハバ-対談

今井洋介 x 江森美奈子(あけぼの新潟)

主催 公益財団法人新潟県健康づくり財団

新潟いのちの物語をつむぐ会について

誰の身の上にもある生老病死について、市民、医療・福祉関係者、宗教者等が一堂に集い意見交換を行い学びあうことによって、これらを自然の営みとして穏やかに受け容れる心の醸成といのちの尊厳についてのより深い理解を共有し、いのちの物語をつむぐことを目的としています。年2回の例会はどなたでも参加できます。皆様のご参加お待ち申しあげております。世話人代表 今井洋介(医療・福祉)、井上陽雄(宗教者)、小出優子(市民)、

第9回例会 in 長岡 《概要》

日 時：12月4日（日）14.00-16.30

会 場：西条山長永寺（長岡市渡里町 1-2）

参加費：一般 1,000 円（会員 500 円）

テーマ： 戦争といのち

《内 容》

*法話：木曾 隆さん
（長永寺住職）

*話題提供：黒岩卓夫さん、中塚英樹さん

*グループワーク：お二人の話を聴いた後、小グループでわかちあい

*問合せ・申込み・電話：0258-33-0804
Mail:info@tyoueiji.com



至大手大橋		長岡駅大手口より	
上田町バス停○	丸山 ○燃料店	*約1km 徒歩10分	
	★長永寺	*バス長岡駅前7番線発	
		上田町下車 徒歩3分	
←至 紅屋重正○	○マンション表町	駐車場	
長生橋	○旧北銀本店（再開発中）	台数に限りがございます。	
		お車でのお越しはご遠慮ください。	
	アオーレ長岡○		
長岡駅			

新潟いのちの物語をつむぐ会事務局より

◆新潟いのちの物語をつむぐ会は、ホームページ、フェイスブックブックを活用しています。のぞいてみて下さい。

◆新規会員募集しています
入会金 1000 円(学生無料)
年会費 2000 円(学生 500 円)

◆会員のみなさまへ

年会費納入についてお願い

2022 年度分年会費 2000 円（学生 500 円）
* 同封の振込用紙にてご入金ください。または、下記の郵便局口座に振り込みください。

口座記号 00560-5 口座番号

《編集後記》

第9号は編集コンセプトを「見やすく、読みやすい」こととし、改善点を二つ。
①本文の文字を13ポイントにアップし、明朝体太字にする。②写真を大きくする。「手に取って、眺めても楽しめる冊子」を目指しました。P15の《お知らせコーナー》は、情報がたくさんでにぎやかになり、文字が小さくなってしまいました。最後に、忙しい中を真剣に議論し、協力して頂いた皆様方に感謝申し上げます。
（第9号編集責任：小出）

新潟いのちの物語をつむぐ会《事務局》
〒940-0075 長岡市渡里町 1-2 長永寺内
電話：0258-33-0804
Mail:info@tyoueiji.com